

兒 山 處 士 序

萬 應 舍 主 入 撰

修 正 小 倉 百 首

夕月夜小倉の山に咲く花紅葉のいろ香深き百首は、うち日さす都を始めて、  
あまさかむる鄙の里々にたると、めで貴ひもてはやしつゝ、幼き女の物いひ  
習ふ頃よりそらよみさへ、はた歌貝ちふ物に作りて翫ひとなすのみならず、と  
つきずる調度の一品にさへ、數へ用るばかりの習慣となりて、糸つむく賤の女  
も、磯なつむ蟹の少女も、歌としいへはかならずまづ、百人一首をなんとあふる  
世とはなりぬ、さるをそが歌のなからは、いとくいまはしき戀の歌ともにて、  
親族どもの中らひなどにては、よむさへ汗あゆる心地せらるゝもいと多かり、  
かゝる歌をしもいとけなきより、讀覺えたらんには、かのならひ性と成るとい  
へる詞のこと、遂に風儀を素し、淫れ事の媒とやらんと、うれたくもうれたま  
限りにこそありけれ、況して開けゆく今の、大御代となりては、萬の事ことあし



きを去り良きに改むる時なるをや、吾朝日に匂ふ櫻井の大人、こをいたく歎き、おもほしく戀の歌をバはぶき捨、みなから四季雜のにせまくほしと、ぬもころにはかられたり、おのれも年ころ思ひ立たるわさふしあれどいかにせん、吾出石の里は過し年、迦具土の神の荒備にかより、民の家居ことくく焼拂はれ、ありとあらゆる書籍とも残りなくやけ失て、見あはすべき歌書などは一ひらだになく、得しも果さてあたら年月をおくりしかど、かくては大人の眞心をも空しくしかのれが志をも遂る時なからんと、此頃思ひ起しておのれがそらおほえに覺えしまにく、ものしつるにてぞありける、さりながら古への歌聖の、心をこめて撰はれたるを拙なき身もてみだりに取いろひせしは、あなかしこいみじき罪なるは更にもいはず、此道に秀たる人々の見たらんにはいたく誇らるべけれども、そはまた改めもし正しも志給はゞ、なかくにおのれがこよなき幸に、そあれ、おのれは唯一むきに、色香たへなる小倉の山の花に紅葉にたち交りて世のさまたけなす、うはらをはかりはらはん道のしをりとなれるになむ。かくいふは、鶯迺舎のあるしなり。

修正小倉百首序

我國婦女、春初必弄牌子。牌子多寫小倉式紙。暗記成誦。不錯一語。兒女漸解語必先口授之。夫人幼時所記。終身不遺。式紙一百。所謂戀歌殆居其半。甚則至猥褻汗穢有過俚歌者。使兒女不學如維新前則已。今也才學日進。混若源泉。若是而不悛。烏保不爲在原業平小野小町一流人物乎。余深慨焉。歌以雅詠代戀歌者數年。未果也。今茲季秋。與故人曰田蔦舍語。談及此事。蔦舍感憤自任。會節過復月。弄牌之期將至。阻勉乃成。榛莽夷。樹嘉列。汗濁疏。清泉發。其有益於世教必矣。史稱後光明天皇不賦和歌。常曰中世式微。和歌源語盛行所致。伊藤仁齋好詠和歌。其集二百八十餘首。而無一戀歌。噫

天皇之聖明。仁齋之嚴正。其憂天下後世也深矣。他日刻成。當先捧一本於天皇陛下。而奠一本於仁齋墓前也。

明治二十五年十有二月

兒山處士 櫻井 勉 撰

凡 例

陽成天皇の御歌參議等の歌はかのれ淺學にして他集にある事を記憶せずよりていとく本意ならぬ共他人をもてさしかへたり儀同三司母も同様なれども拾遺集雜の部に高階成忠女とありて夢とのみ云々とある歌をもて補なひたり。すべて戀の歌に替たる歌は諸歌集に出たるにていづれも秀詠なるは勿論なれども元の歌にくらべなはいさゝか劣れりと思はるるもあるべくはた歌數のすくなきは左まで思はれぬのをも取出て補ひたるもあるべし見ん人いたくな咎め給ひそよ。

<p>(一) 天智天皇 秋の田のかりほの庵の 苦をあらみ 我衣手は 露にぬれつゝ</p>	<p>(四) 山部赤人 田子の浦に打出てみれば 白たへの ふしの高根に 雪はふりつゝ</p>	<p>(七) 阿倍仲麿 天の原ふりさけみれば 春日なる 三笠の山に 出し月かも</p>	<p>(十) 蟬 丸 是やこのゆくもかへるも わかれては 志るもしらぬも 逢坂の關</p>
<p>(二) 持統天皇 春過て夏きにけらし 白たへの ころもほすてふ 天のかぐ山</p>	<p>(五) 猿丸太夫 奥山にもみぢふみわけ なく鹿の 聲きく時ぞ秋は かなしき</p>	<p>(八) 喜撰法師 我庵は都のたつみ 鹿ぞすむ よを宇治山と人は いふなり</p>	<p>(十一) 參 議 篁 和田の原八十島かけて こぎ出ぬと 人にはつけよ あまの釣舟</p>
<p>(三) 柿本人麿 ほのくどあかしの浦の 朝きりに しまかくれゆく 船をしそ思ふ</p>	<p>(六) 中納言家持 鶺鴒のわたせる橋に あく霜の しろきを見れば 夜ぞ更にける</p>	<p>(九) 小野小町 吹むすぶ風は昔の 秋ながら ありしにもにぬ 袖の露かな</p>	<p>(十二) 僧 正 遍 照 あまつ風雲のかよひ路 吹とちよ 乙女の姿しはし といめん</p>

首 百 倉 小 正 修

(十三) 元明天皇 とふ鳥のあすかの里を あきていな 君があたりは見えず かもあらん	(十六) 中納言行平 立列れいなばの山の みねにをふる まつとしきかば 今かへり來ん	(十九) 伊勢 春霞たつを見捨て ゆく馬は はななき里に すみやならん	(廿二) 文屋康秀 吹からに秋の草木の しをるれば うへ山風をあらじと いふらん
(十四) 河原左大臣 けふ櫻車にわが身 いさねれん 香こめにさそふ 風のこねまに	(十七) 在原業平朝臣 千はやふる神代もきかず たつ田川 からくれなゐに 水くいとば	(二十) 元良親王 朝まだき起てぞ見つる 梅の花 よのまの風の うしろめた	(廿三) 大江千里 月みればちいに物こそ かなしけれ 我身ひとつの秋には あらねど
(十五) 光孝天皇 君か爲はるの野に出て わかなくむ わが衣手に 雪はふりつ	(十八) 藤原敏行朝臣 秋來ぬと目にはさやかに みえぬをも 風の音こそ 驚かれぬ	(廿一) 素性法師 見渡せば柳櫻を こきまぜて 都ぞ春の錦 なりける	(廿四) 菅家 此たびはぬさもとりあはず 手向山 もみぢの錦神の まに

首 百 倉 小 正 修

(廿五) 三條右大臣 かくてのみやむへき物か 千早ふる 加茂の社の 万代を見ん	(廿八) 源宗于朝臣 山里は冬そさひし まさりける 人めも草も かれぬと思へは	(三十一) 坂上是則 朝ほらけ有明の月と 見るまてに よし野の里に ふれるしら雪	(三十四) 藤原興風 誰をかもしる人にせん 高砂の 松も昔の 友ならなくに
(廿六) 貞信公 小倉山峯のもみち葉 心あらは 今一たひの 御幸またなん	(廿九) 凡河内躬恒 心あてにをらはやをらん はつ霜の あきまどはせる しら菊の花	(三十二) 春道列樹 山川に風のかけたる しからみは なかれもあへぬ 紅葉なりけり	(三十五) 紀貫之 人はいさ心もしらす 古さとは 花も昔の 香に匂ひける
(廿七) 中納言兼輔 人の親の心はやみに あらね共 子を思ふ道に まどひぬるかな	(三十) 壬生忠岑 春たつといふはかりにや み吉野の 山もかすみて けさはみゆらん	(三十三) 紀友則 久かたの光りのとけき 春の日に しつ心なく 花のちるらん	(三十六) 清原深養父 夏の夜はまた宵ながら あけぬるを くものいつこに 月宿らん

<p>(三七) 文屋朝康 しら露に風の吹しく 秋の野は 貫きとめぬ 玉そ散ける</p>	<p>(三八) 右 近 年月のゆくへも知らぬ 山かつは 瀧の音にや 春をしるらん</p>	<p>(三九) 大伴黒主 かみ山いさ立よりて 見てゆかん 年へぬる身は 老やしぬると</p>
<p>(四十) 平 兼盛 暮てゆく秋のかたみに おく物は わか元結の 霜にそありける</p>	<p>(四十一) 壬生忠見 さよ更て寐さめさりせば 子規 人傳にこそ きくへかりけれ</p>	<p>(四十二) 清原元輔 秋の野の萩の錦を 吾宿に 鹿の音ながら うつしてしかな</p>
<p>(四十三) 權中納言敦忠 千年ふる霜の鶴をば あきなから 久しきものは 君にそありける</p>	<p>(四十四) 中納言朝忠 くら橋の山のかひより はる霞 年をつみてや 立渡らん</p>	<p>(四十五) 謙 徳 公 たくひなき色にもあるかな 菊の花 いかなる霜の おけはなるらん</p>
<p>(四十六) 曾根好忠 みた屋もりけふはさつきに なりにけり いそけやさな 老もこそすれ</p>	<p>(四十七) 惠慶法師 八重葎しける宿の 淋しきに 人こそ見えぬ 秋は來にけり</p>	<p>(四十八) 源 重之 吉野山峯の白雪 いろきえて けさは霞のたち かはるらん</p>

<p>(四十九) 大中臣能宣朝臣 散る花にせきとめらるゝ 山川の ふかくも春は なりにけるかな</p>	<p>(五十) 藤原義孝 野邊見れば彌生の月の はつるまで またうら若き さいたつまかな</p>	<p>(五十二) 藤原實方朝臣 都入まつをもしらて 時鳥 月のこなたに けふはなかなん</p>
<p>(五十二) 藤原道信朝臣 さよ更て風や吹らん 花の香の 匂ふこゝ地の 空にするかな</p>	<p>(五十三) 右大將道綱母 都人寐て待らめや 郭公 いまそ山へを なきて出なる</p>	<p>(五十四) 儀同三司母 夢ぞのみ思ひなりにし 世の中を なに今更に 驚かすらん</p>
<p>(五十五) 大納言公任 瀧の音はたえて久しく なりぬれど 名こそ流れて 猶きこえけれ</p>	<p>(五十六) 和泉式部 外山ふく風の風の 音きけば またきに冬の 奥そしらるゝ</p>	<p>(五十七) 紫 式 部 めくりあひてみしやそれ共 わかぬまに 雲かくれにし 夜半の月哉</p>
<p>(五十八) 大貳三位 はるかなる唐土までも ゆくものは 秋の寐覺の 心なりけり</p>	<p>(五十九) 赤染衛門 思ふことなくてやみまし 與佐の海の 天の橋立 都なりせば</p>	<p>(六十) 小式部内侍 大江山いく野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天の橋立</p>

首 百 倉 小 正 修

<p>(六十二) 伊勢大輔 古への奈良の都の 八重櫻 けふ九重に 匂ひぬるかな</p>	<p>(六十二) 清少納言 もどめてもかいる遊の 露をおきて うき世にまたは 何かかへらん</p>	<p>(六十三) 左京大夫道雅 諸共に山めぐりする 時雨かな ふるにかひなき 身とは知らずや</p>
<p>(六十四) 權中納言定頼 朝ほらけ宇治の川霧 たえくくに あらはれ渡る 瀬々の網代</p>	<p>(六十五) 相摸 あはれにも暮ゆく年の 日敷かな かへらんことは 夜のまと思ふに</p>	<p>(六十六) 大僧正行尊 諸どもにあはれと思へ 山櫻 花より外に しる人もなし</p>
<p>(六十七) 周防内侍 櫻花をしむ心の いく度か ちる木のもとに ゆきかへらん</p>	<p>(六十八) 三條院 心にもあられて浮世に なからへは 戀しかるべき 夜半の月かな</p>	<p>(六十九) 能因法師 あらしふく三室の山の もみち葉は たつ田の川の 錦なりけり</p>
<p>(七十) 良暹法師 さびしさに宿をたち出で なかむれば いづこも同じ 秋の夕暮</p>	<p>(七十二) 大納言經信 夕されば門田の稻葉 音づれて あしのまろやに 秋風そふく</p>	<p>(七十二) 祐子内親王家紀伊 あく縮もしつ心なく 秋風に みたれてさける 眞野の萩原</p>

首 百 倉 小 正 修

<p>(七十三) 權中納言匡房 高砂の尾上の櫻 咲にけり 外山の霞たすも あらん</p>	<p>(七十四) 源俊頼朝臣 あすも來ん野路の玉川 萩こえて 色なる波に 月宿りけり</p>	<p>(七十五) 藤原基俊 契りおきしさせもか露を 命にて あはれことしの 秋もいぬめり</p>
<p>(七十六) 法性寺入道前關白大政大臣 和田の原とき出て見れば 久かたの 雲井にまかふ 沖つしら涙</p>	<p>(七十七) 崇徳院 もみち葉の散ゆく方を 尋ぬれば 秋もあらしの 聲のみそする</p>	<p>(七十八) 源兼昌 淡路嶋かよふ千鳥の なく聲に らくよ寐さめぬ 須摩の關守</p>
<p>(七十九) 左京大夫顯輔 秋風にたなひく雲の たえまより もれ出る月の 蔭のさやけさ</p>	<p>(八十) 待賢門院堀川 常磐なる松もや春を しりぬらん はつねを祝ふ人に ひかれて</p>	<p>(八十一) 後徳大寺左大臣 ほどしきす鳴つるかたを なかむれば 只有明の月そ 残れる</p>
<p>(八十二) 道因法師 かものある入江の蘆は 霜かれて あのれのみこそ 青羽なりけれ</p>	<p>(八十三) 皇太后宮太夫俊成 世の中よ道こそなけれ 思ひいる 山の奥にも 鹿そなくなる</p>	<p>(八十四) 藤原清輔朝臣 なからへは又此頃や 忍はれん うしと見し世そ 今は戀しき</p>

<p>(八十五) 俊 惠 法 師 なかもやる心のはてそ なかりける 明石の沖にすめる 月かけ</p>	<p>(八十六) 西 行 法 師 心なき身にもあはれば 知られけり 鳴たつ澤の 秋の夕暮</p>	<p>(八十七) 寂 蓮 法 師 村雨の露もまたひぬ 楨の葉に きり立のほる 秋の夕暮</p>
<p>(八十八) 皇 嘉 門 院 別 當 山川におろす笈の うきながら すきゆくものは 吾身なりけり</p>	<p>(八十九) 式 子 内 親 王 かへり來ぬ昔を今と 思ひ寐の 夢の枕に 匂ふ橘</p>	<p>(九十) 殷 富 門 院 大 輔 春風の氷吹とく たえまより みたれてなひく 青柳の糸</p>
<p>(九十一) 後 京 極 攝 政 大 政 大 臣 きりくすなくや霜夜の さむしろに ころもかたしき 獨かも寐ん</p>	<p>(九十二) 二 條 院 讚 岐 散かゝるもみちの色は 深けれど わたれば濁る 谷川の水</p>	<p>(九十三) 鎌 倉 右 大 臣 世の中は道にもかゝるな 渚こく あまの小舟の 綱手かなしも</p>
<p>(九十四) 參 議 雅 經 三吉野の山の秋風 さよふけて ふる里さむく 衣うつこ</p>	<p>(九十五) 前 大 僧 正 慈 圓 あふけなく浮世の民に おほふかな 我たつ袖に すみ染の袖</p>	<p>(九十六) 入 道 前 大 政 大 臣 花さそふ風の庭の 雪ならて ふりゆくものは 我身なりけり</p>

<p>(九十七) 權 中 納 言 定 家 駒とめて袖打はらふ かけもなし 佐野のわたりの 雪の夕暮</p>	<p>(九十八) 從 三 位 家 隆 風そよく奈良の小川の 夕暮は みそきそ夏の しるしなりける</p>	<p>(九十九) 後 鳥 羽 院 人もをし人も恨めし あちきなく 世を思ふゆゑに 物おもふ身は</p>
<p>(百) 順 德 院 百敷やふるき軒端の しのぶにも なを餘りある 昔なりけり</p>		

明治廿六年九月十四日印刷  
同廿六年九月十日發行



編者兼發行者

東京市四谷區北伊賀町廿九番地

藤井米八郎

印刷者

全牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地

根岸高光

發行所

全麹町區下六番町六番地

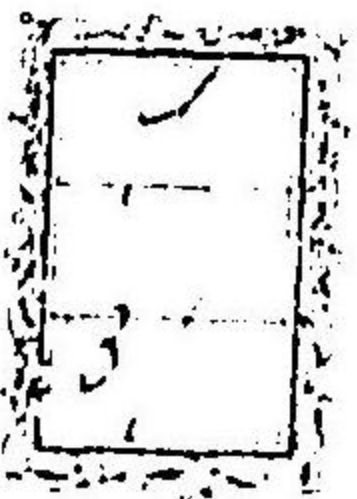
女學雜誌社

印刷所

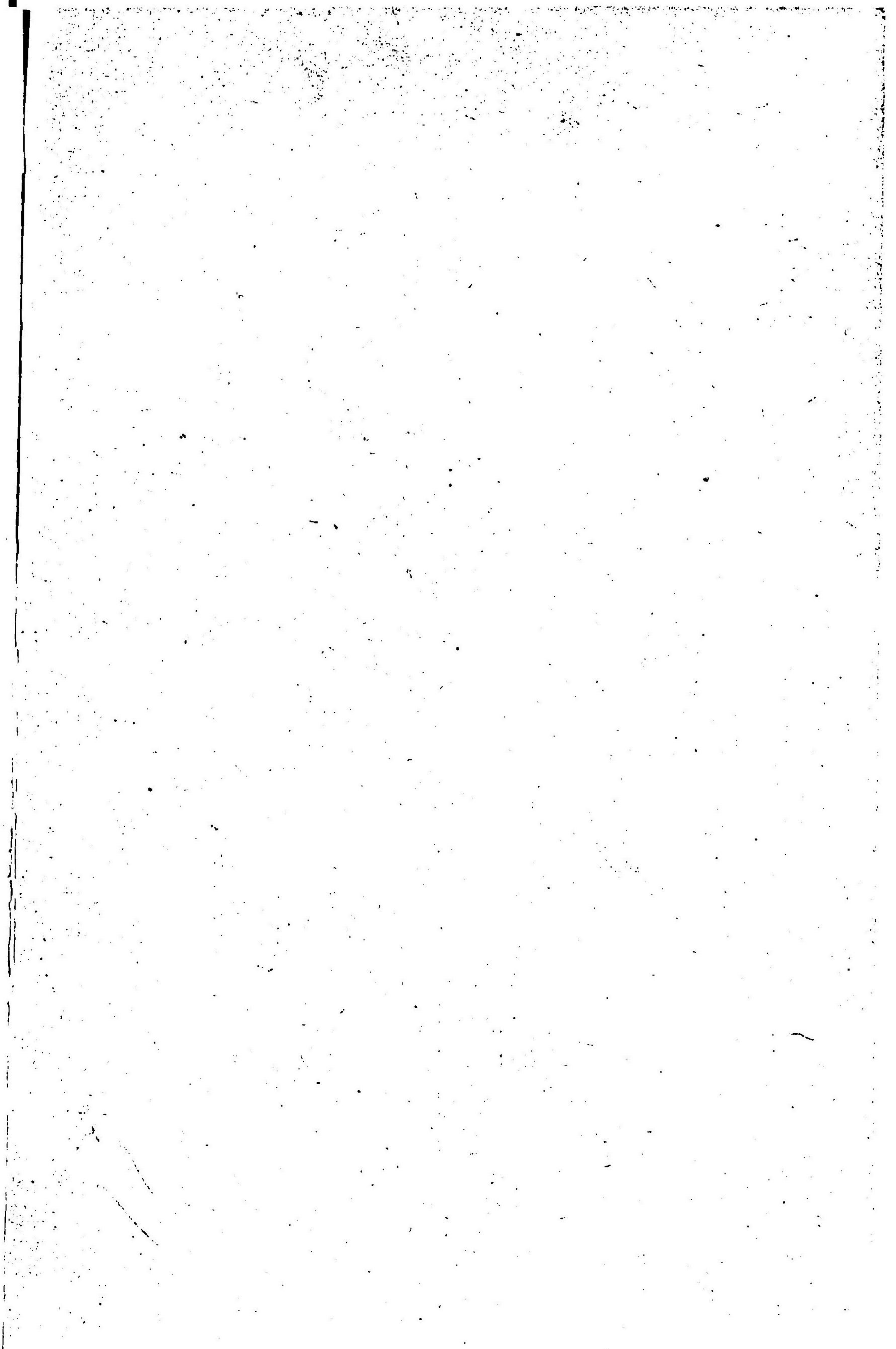
全牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

秀英舍工場

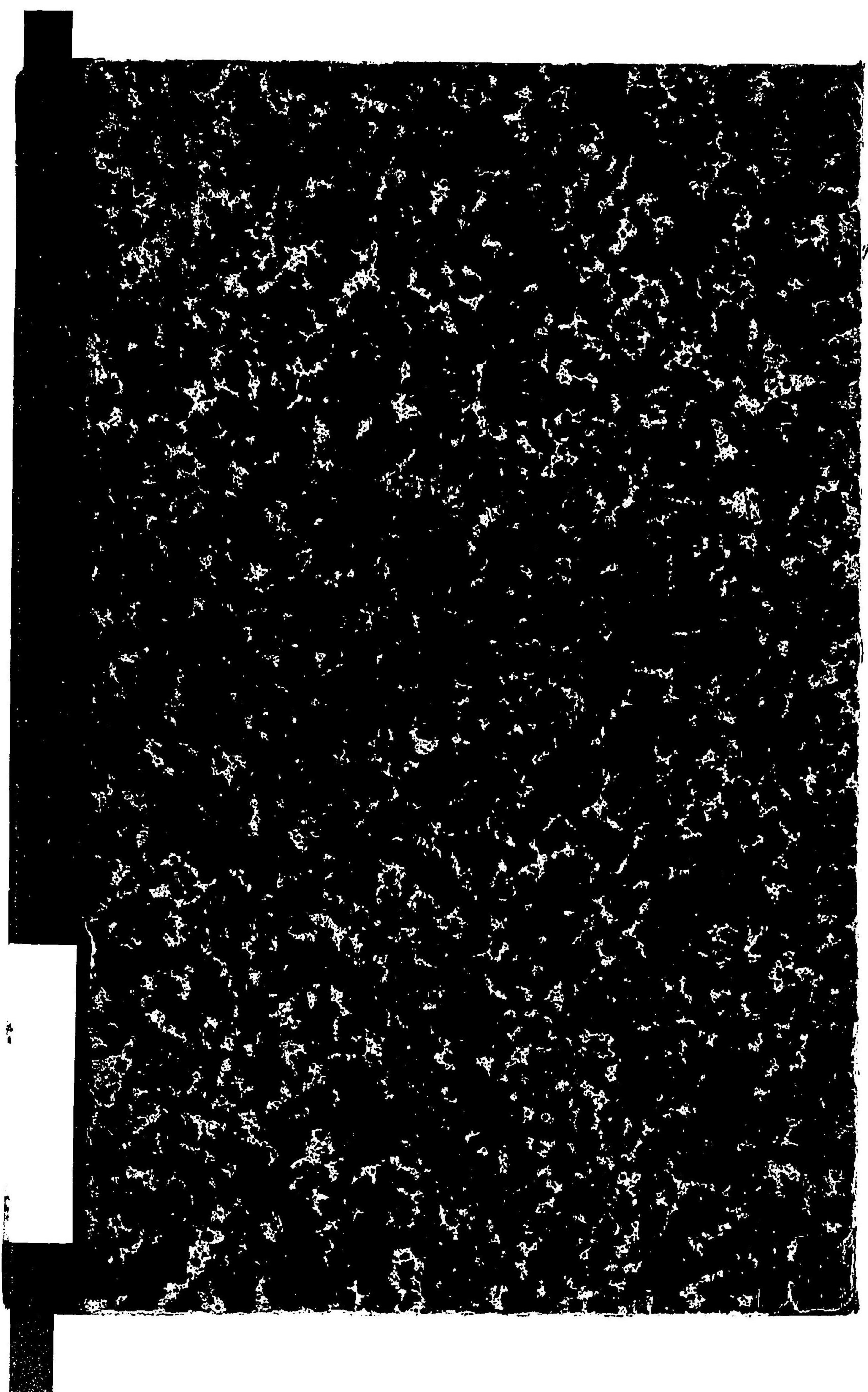
(電話十九番)







40
131



40

131

(M)

修正小倉百首

086093-000-7

40-131

修正小倉百首

蔦廼舎主人/撰

M26

DBD-0786



